

研究だより

寒河江市立三泉小学校

令和7年10月29日（水）

NO.5

第2学年「かけ算(1)」、第3学年「かけ算の筆算(1)」(授業者:羽賀理紗先生)

◎成果

- ・大事な語句をおさえて活動に入ること、みんなが集まった時に、学習リーダーを中心に語句を使って対話を行うことができた。(第2学年)
- ・自分の言葉でノートに書いたり、言葉を付け足したりすることで、自分の学びが残ったノートになる。(第2学年)
- ・「()に ()ずつ ()分で ()です。」の形でのワークシートを利用し、「1つ分」と「いくつ分」を意識して話したり、書いたりしていた。(第2学年)
- ・学習リーダーを中心に、みんなで進めようとする姿が見られた。(第3学年)



○課題

- ・「見つける」という課題にしたことで、立式するイメージをもたずに学習が始まった子もいた。どこをねらうかを具体的に課題に反映させる。(第2学年)
- ・「分からないこと」を質問し合う姿が見られなかった。「分からない」を共有したり、みんなで違いを見つけたりと、対話の中で正解にたどり着く話し合いができるとよい。(第3学年)

第5学年「図形の角を調べよう」(授業者:渡邊里美先生)

◎成果

- ・教室背面に掲示した既習の学習内容を確認しながら考える子どもの姿が見られた。既習内容の掲示は子どもの思考をつなぐために有効であることがわかった。
- ・自分に合った学習形態を選択することで、学力差があっても、それぞれが意欲的に学びに向かう姿が見られた。また、適用題が終わった後、自分で学びを選択できることで、自分のペースで意欲的に学びを深めることができた。
- ・学びのプランと振り返りを一体化させたシートに書くことで、本時の課題に対して自分は達成できたのかの振り返りがしやすい。また、単元を通した自分の学びの軌跡を見返しやすい。

○課題

- ・4の適用題→自分で選択した課題に取り組む時間が短くなってしまった。1から3の活動を効率的にし、無駄を省くことで、4の活動時間を確保したい。
- ・適用題が終わった後、教師のところに答えを確認に来る子ども、「自学でやりたい」とアピールする子どもの姿が見られた。教師の存在を意識せず、自分で学ぶという“自立した学習者”をめざしていきたい。

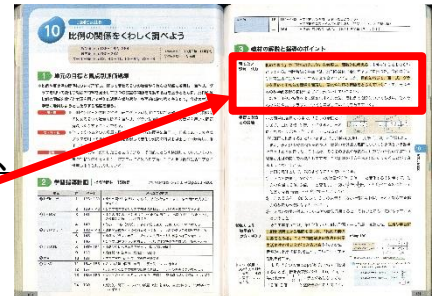


学びをつなげよう！

今回の事後研で、織江真由美主任指導主事と高取真実指導主事のご指導の中で、「本単元で育てたい資質・能力を意識した授業づくりを目指すこと」がありました。そこで今回は、本単元で育てたい資質・能力を意識した授業づくりでどのようなことを意識するといいいのかをまとめました。以下の(1)～(3)を当たり前のように行っている先生方も多いと思いますが、その大切さを再度確認していただければと思います。

(1) 本単元で育てたい資質・能力を明確にする。

単元のはじめに、本単元で育てたい資質・能力を明確にします。
東京書籍出版の「新編 新しい算数 教師用指導書 指導編」では、各単元のはじめのページに「1 本単元で育てたい資質・能力」が記載されています。



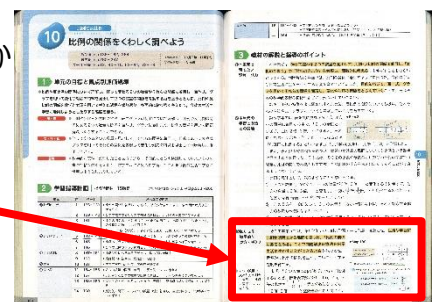
- 第6学年「比例の関係をくわしく調べよう」の単元を例にとると、この単元で育てたい資質・能力は、以下の3つにまとめることができます。
- ① 伴って変わる2つの数量を見いだして、比例・反比例の関係に着目し、「変化のきまり」や「対応のきまり」を考察し、関数的に考える力
 - ② 問題解決の場面で、比例の関係に着目するよさに気づき、今後の学習や日常生活に生かそうとする態度
 - ③ 目的に応じて、表、式、グラフを用いてそれらの関係を表現し、変化や対応の特徴をとらえていくことで、それぞれの数学的表現の特徴やよさに気づく力

(2) 今日は何ができるようになるとよいのかを明確にする。

本単元で育てたい資質・能力が、単元の終わりに児童に身に付いているようにするためには、児童が今日の授業で何ができるようになるとよいのかを明確にします。

第6学年「比例の関係をくわしく調べよう」の第3時の目標は「 y が x に比例するとき、 y =決まった数 $\times x$ と表すことを理解し、比例の関係を式に表すことができる」です。つまり、今日の授業で、児童は、表を見て比例の関係を式に表すことができるようになるとよいと考えます。

そして、そのような児童の姿を目指すために、授業者が意識したいのが「働かせる数学的な見方・考え方」(本校の指導案では「働かせたい数学的な見方・考え方」と表記している)です。東京書籍出版の「新編 新しい算数 教師用指導書 指導編」では、各単元のはじめのページに「3 働かせる数学的な見方・考え方」が記載されています。第3時の「働かせる数学的な見方・考え方」は「2つの数量の対応のきまりに着目し、比例の式や『決まった数』の多様な意味について考える」となっています。



それぞれの時間で、児童が、何に着目し(数学的な見方)、どのように考えるか(数学的な考え方)を意識しながら、授業の終わりに何ができるようになっていけるとよいのかを明確にしておくことが大切です。

(3) 目標を達成できたかを見とれるような評価問題等で評価する。

「今日は何ができるようになるとよいのか」という目標を児童が達成できたかを見取るために、評価問題等で評価をします。

このような評価をすることで、児童のつまずきに気付いたり、授業者の今後の授業改善につながったりすることができます。